

＝ 第3号 ＝

発行日:2014年11月1日

編集:立命化友会事務局
編集責任者:金川義孝〒525-8577
滋賀県草津市野路東1-1-1
立命館大学生命科学部・
薬学部事務室内

TEL.077-561-2658

FAX.077-561-2659

e-mail:kayukai@st.ritsumeai.ac.jp



立命化友会ニュース

会長就任にあたって

白井 総

(昭和五十六年卒)

てこられました同窓会の流れを継承し、新たな発展に繋げていききたいと存じます。

今総会での各議事内容のご承認に引き続き、記念講演としまして、谷口先生からは、立命館の歴史や理工学部の移転経緯と同窓会発足のエピソードやその後の発展についてお話いただきました。また創立三十周年祝賀会では、各世代の皆様方との相互交流や校歌斉唱で、懇親を深めていただけたと思えます。今回はご来賓・会員あわせて約二百三十人の方々にご参加いただき、改めまして皆様方へのご協力ご支援に感謝申し上げます。

去る七月二十日に開催されました立命化友会第二回総会におきまして、皆様のご承認をいただき、新しく立命化友会の会長を拝命することとなりました。身に余る光栄と同時に重い責任を感じております。微力ではございますが、過去三十年間、諸先輩の皆様が築い

何とか卒業できた記憶があります。「②特別企画セミナーや各種同好会卒業研究では物理化学研究室に配属となり鈴木啓三先生、山本善史先生にはご丁寧に教えていただき大変お世話になりました。卒業後はプリント配線板の製造販売会社に勤務し、国内だけではなく海外での事業展開(主に中国)の経験もさせていただきました。現在は主に新規ビジネスの情報収集に携わっております。

「②特別企画セミナーや各種同好会活動(ゴルフ・ハイキング・釣り天狗クラブ・温泉研究会)に対して広報面での支援を拡充する」③若い会員の方にも参加したいと思える事業展開を皆様のご意見を取り入れながら検討する」等があげられます。

私自身、学生の頃から人との付き合い方も手な方で、同窓会活動にもそれほど関心があつた訳ではありませんが、年齢を重ねるうちに視野を広げる意味もこめて、二十周年記念式典あたりから幾度か会合に出席させていただく様になりました。諸先輩や若い世代の方々と話す機会が増える中で幹事へのお誘いがあり、この度はこのびとなつております。

今後の立命化友会の運営につきましては、これまでの良いところは残しつつ、自由な発想で新しい企画を拡充できればと考えております。

最後に、健康ご多幸をお祈り申しあげ、就任の挨拶とさせていただきます。

具体的には、「①ニュース発行と合わせてインターネットでのホームページを拡充(定期的更新)する」

重苦しい春、嬉しい出来事、新しい春へ

薬学部長 今村 信 孝



のかとご心配おかけしたのではと思います。残念ながら、芳しくない結果に終わってしまいました。申し訳ありません。

昨年度の会報に、やはり薬学部近況というタイトルで寄稿させていただきました。その際には、我が国には四年制と六年制の二つの薬学教育課程があり、本学薬学部は薬剤師養成に主眼を置いた六年制で、二〇一四年春にはいよいよ一期生が薬剤師国家試験を受けますと報告させていただきました。例年ですと、新聞にも大学別の国家試験合格率などが掲載されていたように思いますが、今年は詳細な記事は少なく、薬剤師国家試験の合格率が10%以上も下がったという報道だけだったかと思えます。母校に新設された薬学部はどうだった

肩を落とした先輩の後姿を見てはつきりと悟ったようです。二期生は前期で卒業研究を終え、多くの学生は少しずつペースを上げて、国家試験を目指した猛勉強に突入します。試験勉強の支援体制はさらに強化しましたので、来春こそ皆様のご期待に応えられるものと確信しています。

さて、そんなわけで二〇一四年春は薬学部教職員にとって、ひどく重苦しい春でしたが、嬉しい出来事もありました。この春、四年制の薬学研究科博士課程を三名の定員で設置いたしました。ささやかな定員ではありますが、設置認可が下りたのが昨年十月末で学生への周知もままならず、また、初の国家試験受験という大イベントの陰で、本当に入学者が居るだろうかと心配いたしました。教員の様々な方面への働きかけのおかげで、二名の社会人の方をお迎えすることができ、胸を撫で下ろした次第です。この夏に行いました来年度入学の学内進学者の募集では、二名の応募者があり合格とし、さらにこれからの入試にも志願者が居ると聞いており、博士課程の入学者数は順調な滑り出しとなりました。鬼も笑うという来年の話になってしまいました。もう少し来春予定されている薬学部の改革・新展開を報告させていただきます。

でもカリキュラムを改定し、医療人としての自覚、技能を高めるべく、様々な新しい取組を取り入れていきます。コミュニケーション能力を高めるための演習では、地域のボランティアの方々を相手に学生が医療コミュニケーションの練習をします。また、近隣の医科大での人体解剖の見学など、立命化友会諸先輩方の時代では思いもよらないメニューが準備されています。さらに、三回生では実習を週一回の単発的なものではなく、連続日程で行わせるなど、これまで以上に濃密なカリキュラムへ改定します。もう一つの大きなトピックは、研究者養成を目標に掲げ四年制の創薬科学科を、二〇一五年の春に六十名の定員で開設することです。この学科を卒業しても薬剤師国家試験の受験資格はありませんが、世界有数の研究力を持つ我が国の薬学研究を牽引していく人材を養成したいと考えています。四年制の薬系学科は国立公立大学に多く、私立大学では一部の伝統校にあるだけです。研究大学の立命館に相応しい薬学部への更なる発展へ、創薬科学科と薬学科とが相乗的に働き、成果を挙げるものと期待しております。さらに生命科学部と協調しながら歩んでいくことにより、大いなる飛躍へと繋がると考えています。今後とも温かなご支援を、よろしくお願いいたします。

新学部長としてのご挨拶と近況報告

生命科学部長 里見 潤



と考えています。

生命科学部・薬学部誕生の源流である理工学部時代の化学科、あるいはそれよりも以前の専門学校当時から育まれ引き継がれてきていると思われる「学生をしっかり育てつつ新たな創造に果敢に取り組む精神」を大切にしつつ、世界と未来に目を開き、学部長の職責を全力で果たしていきたいと考えていますので、立命化友会の皆様のご支援を是非よろしくお願いいたします。

■新棟建設

現在、生命科学部の基幹施設となる理工新棟I（名称：Bio Link）が建設中であり、二〇一五年二月には竣工の予定です。この新棟の規模は八階建てで総床面積が約一万平方米メートルです。学部からの要望も反映され、学生にとって従来よりも快適性の増した空間が組み込まれた設計になっています。びわこ・くさつキャンパスでは、学部施設をできるだけ一か所に集めるように配置するゾーニング計画が進められており、将来を見越して、現在建設中の建物に隣接するかたちで増設可能なリザーブスペースが確保されています。

学部の更なる発展のために重要なこの時期に、思いがけず私が生命科学部の学部長を引き受けることとなり、日々、その責任の重さをひしひしと感じています。私自身は本当に微力ではありますが、優れた能力と可能性を備えた教職員が集まった生命科学部ですから、皆で力を合わせ、学部としての一体感を持った自由闊達な雰囲気の中で、より高い教育力、より高い研究力を目指していきたい

この新棟には、生命科学部のほぼすべての

教員の教員研究室（個人研究室）が設けられ、多くの卒業研究室が入ることになります。新たな施設での新たな研究の進展はもちろんのこと、従来に増して学科間、教員間のコミュニケーションが活発化することも期待されています。

また、二〇一五年には、この新棟の竣工とともに、ST（学生・教員）比改善の施策により教員が増員されることになり、教育の質の向上および研究活動のさらなる活性化が期待できる状況が生まれています。

■グローバル化の課題とカセサート大学、チェンマイ大学訪問

生命科学部では、昨年九月から文部科学省の支援を受け、五年間にわたり毎年タイおよびインドネシアから修士課程三名、博士課程二名を国費留学生として受け入れるプログラムをスタートさせています。

このプログラムの関係で、八月末に生物工学科の若山先生とともにタイに赴き、カセサート大学とチェンマイ大学を訪問してきました。それぞれの大学から派遣され、現在、生物工学科の久保先生と応用化学科の稲田先生のもとで研究に励んでいるタイ人留学生の活動状況を出身大学の学部長や先生方に報告し、また、今秋より来日し生命情報学科の天野先生と生物工学科の若山先生のもとで研究に取り組む予定の学生にも直接会って様々な意見交換を行い受け入れの準備状況なども伝えてきました。

両大学を実際に訪問してみても、例えば、立木先生が中心になって理工学部の生物工学科時代から二十年以上にわたりチェンマイ

大学と共同研究や研究者・学生の交流を継続してきていることや、カセサート大学とすでに多くの共同研究がなされるなど深い交流があることなどが、生命科学領域において両大学と立命館大学との間の良好な関係が築けていることの背景にあるということであらためて知ることができました。

また、バンコクおよびチェンマイで開催された日本の大学をタイで紹介する「日本留学フェア」にも参加してきました。日本の多くの大学がタイから留学生を積極的に受け入れようとしていること、タイの高校生やその保護者の方々が日本の大学に強い関心を持っているということがひしひしと伝わってきました。

この秋には、「日本留学フェア」参加や大規模訪問の目的で、生命科学部の教職員がインドネシア、ベトナム、ミャンマーも訪れる予定です。

私自身、三十年以上前に西ドイツ政府の国費留学生として、ドイツ・ケルンスポーツ大学のスポーツ医学研究所で五年間にわたり研究に携わる機会に恵まれ、数々の素晴らしい経験をすることができました。世界中から学生・研究者が集まる大学でしたから、当時、研究所ではブラジル、インド、中国、ポーランド、ベルギー、ノルウェー出身の若手研究者らとともに研究に取り組みました。そのようなことを思い出しながら、立命館大学生命科学部も、世界から学生・研究者が集まり、また学生・研究者が世界に羽ばたく学部に育っていくことを夢見ています。

来年のこの時期に、また一歩前進した生命科学部の姿を報告できればと思っています。

第二回総会および

同窓会創立三十周年記念祝賀会

(ニュース報告)

二〇一四年七月二十日(日) 十四時よ

り、京都タワーホテルにおいて、立命化友会第二回総会および同窓会創立三十周年記念祝賀会が開催された。本年は薬学部第一期生が卒業するというおめでたい年であると同時に、旧同窓会組織である応化会、さらにその前の化学科同窓会から数えて三十年を迎えることになる年で、新卒の二十代から九十代まで幅広い年代層の会員約二百三十名が集まったの盛大な総会と祝賀会になった。

総会での議事内容

花崎幹事の司会進行で、開催に当たって過去三年間の会員物故者の紹介があり、ご冥福をお祈りして黙祷をおこなった。その後、会長挨拶、来賓と祝電の紹介があり、議長として北尾会長を選出して議事に入った。

1. 会則変更

六年制である薬学部第一期生が本年卒業したことに合わせて、会則別表の会員に薬学部と薬学部研究科の卒業生を加えることとした。

2. 事業と会計について

二〇一三年度事業・決算と二〇一四年度事業計画・予算について執行部から提案があり、審議して承された。内容はほぼ例年通りである(詳細は十六ページ)。



3. 役員選出に関する件

会長については役員選考委員会から幹事会の議をへて提案があり、総会において白井総氏が新会長として選出された。その他の役員も併せて満場一致で可決された(詳細は十四・十五ページ)。

記念講演会

引き続き同会場で、記念講演会が開催され、立命化友会副会長の谷口吉弘氏により「私の中の立命館―これまでとこれから」という演題でお話しいただき懐かしいお話も含め参加者一同興味深く拝聴した(詳細は五ページ)。



懇親会

講演会終了後会場を隣室へ移して懇親会が開催され、久しぶりの顔ぶれを探しながら和やかに親睦を深めた。途中、タワーホテルの食事券などたくさん景品を前にした抽選会も開催され、番号の読み上げに一喜一憂したが、そのアナウンスの声もかき

消されるほどの盛況で、あっという間の二時間であった。帰りにはホームプラネタリウムなどのお土産を手にも余韻を残しつつ散会した。次回二〇一七年総会でお会いしましょう。



私の中の立命館

これまでとこれから

谷 口 吉 弘

(昭和四十年卒)

平安女学院中学校・高等学校 校長
平安女学院大学 副学長



私の立命館との直接的な関わりは、昭和三十六年、立命館大学理工学部化学科に入学したことに始まります。

当時、理工学部には二部(夜間)のコースもあり、化学科一学年の学生数は百名を優に超す大人数で、三クラス編成だったと記憶しています。当時、指導担任制があり、私のクラスは杉田先生が担当で、良くコンパやハイキングにお誘いしたのが思い出されます。この関係で、杉田先生のおられた木造校舎の一番東南にある有機合成化学研究室にはよくお邪魔していました。卒業研究は私の希望もあり鈴木研究室に配属されました。当時、鈴木先生は米国プリンストン大学へ留学中不在で、有機合成化学研究室出身の三代沢先生が助手をしておられ、杉田研究室とは正反対の北西の実験棟が研究実験室で、学部の最後の一年を過ごしました。

大学院(昭和四十年)へ進学と同時期に、化学科は木造校舎から鉄骨コンクリート六階建へ移転しました。一、二階が土木工学科研究実験室、三階は講義室、四、五階が化学科の研究実験室で、理工学部の建物としては最大規模の建物です。物理化学研究室は六号館四階東側に

あり、部屋の作りは、プリンストン大学カウツマン教授の部屋を模した研究実験室兼教授室で、他の研究室実験室とは異なっていました。私は、大学院生(修士・博士課程)時代この研究実験室で研究を続けていましたので、鈴木先生とは常時研究の進め方について議論ができたのは、その後の研究展開にとっても有益でした。

大学院修了後、幸いにも鈴木研究室の助手(昭和四十五年)として採用いただき、立命館大学での教員生活の第一歩を踏み出すことになりました。同時に、提出した博士論文は、名譽なことに立命館大学で初の博士甲一号を授かりました。その後の立命館大学博士甲号取得者は、現在、九七〇名に上っています。昭和五十年、カナダ国立研究所(オタワ)で一ヶ年間研究生活を送り、世界の一流の研究に触れることができました。昭和五十五年頃から、新制大学化学科として発足以来、学科の運営に多大な役割を果たされた先生方が定年退職を迎える時期にありました。この状況のもとで、松田十四夫先生を中心として同窓会結成に向けた動きがあり、昭和五十八年六月、天野総長をお迎えして「化学科」同窓会の発会式が開かれ、初代会長に吉田巖氏(永和化成工業株式会社 社長)が就任されました。その後、同窓会の名称は学科の発展とともに「応化会」、そして現在の「立命化友会」へと変化してきました。

文社系学部が広小路から衣笠に移転する一拠点計画の完成後の昭和六十年以降、学園運営が厳しさを増す中、二十一世紀の立命館の在り方について検討する「二十一世紀学園構想委員会」が設置され、理工学部の代表として私が委員として加わることになりました。この委員会を通して、文社系の先生方と議論を交わす中で、「理工学部は金ばかりかかって、学園に何の貢献もない。理工学部は立命館のチベットだ」と他学

部から揶揄されました。立命館の次の大きな課題の一つは、理工学部の財政自立で、二十一世紀学園構想委員会答申の中で、「理工学部再編・第二キャンパス問題」が組み込まれました。それを受けて、第四次長期計画委員会が発足し、理工学部の赤字解消を目指すための方策を策定することになり、理工学部からは引き続き私が委員として加わりました。

新制大学設立の翌年に設置された理工学部は長らく五学科入学定員約五〇〇名体制で運営され、学部単独としては常に赤字体質を抱えていました。この財政構造を抜本的に改善するため、学部規模を二倍の十学科一〇〇〇名規模に拡大する必要があり、その内容を第四次長期計画委員会第一次答申の中で、「二十一世紀の科学技術を展望した新しい理工学部を目指して―その教育と研究の展開―」とし全学部の討論に付しました。この構想は、学部十学科入学定員一〇〇〇名の壮大なスケールの拡充計画です。これだけの規模の理工学部を収容するためには、広大な土地が必要になり、折しも滋賀県が草津市の土地五十六万平方メートルを無償提供するという当時としては全国でも例をみない大型公私協力関係が成立し、理工学部の再編拡充計画が現実のものとなりました。平成六年、滋賀県草津市に新キャンパスが完成し、多くの新任教員を迎え教育内容も一新され、化学科には新たに生物工学科が加わり、応用化学系として共に協力関係の下で新しい教育研究体制がスタートしました。平成十二年には化学科は応用化学科に、生物工学科は化学生物工学科に名称変更し、さらに、平成十六年に情報理工学部の設置に伴い生命情報学科が開設されました。

立命館は、常に社会の要請を受け、時代に求められる人材養成を行ってきました。二十一世紀は生命科学を基盤とした科学技術が社会や市民生活に深く浸透し、医療、健康、環境、食糧などの分野の人材育成が急務とされています。そこで、平成十八年生命科学部・薬学部設置委員会が設置され、その委員長に就任して、平成二十年の生命科学部と薬学部の設置を目指すことになりました。生命科学部の設置に関して、従来の応用化学科、生物工学科、生命情報学科に加えて、新たに医療系の生命医科学科と薬学部(六年制)を新設する二学部構想です。医療系の生命医科学科や薬学部の設置に関しては、他大薬学部・薬学部との連携が不可欠です。また、薬剤師養成の六年制薬学制度が発足して間もないこともあり、六年制薬学部の明確な指針のない状況もあり、設置後も薬学部の運営をめぐる混乱が続き、薬学実習体制や実習施設の変更を余儀なくされ、生命科学・薬学部棟に加えてあらたに薬学実習棟を建設することになりました。また、薬剤師養成と創薬研究の教育が互いに合入れれない矛盾を含んだ学部構想であるとの指摘を受け、平成二十六年四月、薬学部に四年制の創薬科学科を設置されることになりました。

平成二十七年は立命館が大いに飛躍する年でもあります。四月に大阪茨木市に第三のキャンパスが誕生し、衣笠の政策学部とBKCCの経営学部が移転し、平成二十八年に向け、総合心理学部の設置が予定されています。また、経営学部の空スペースを利用して、BKCCに食に関する学部構想も議論されていると聞いています。学生・教員として過ごした立命館での五十年間、理工学部の一学科としてスタートした化学科が生命科学部・薬学部の二学部へ大きく飛躍発展する諸事業に関わられたことは幸せでした。今後、教職員が一致協力して、生命科学部と薬学部の発展に貢献され、両学部を卒業した若人が二十一世紀の世界で活躍することを、卒業生の一人として切に願い、筆を置きます。

立命館大学生命科学部・薬学部

「プロジェクト発信型英語プログラム」を

振り返って

鈴木 佑 治 (平成二十年着任)



立命館大学生命科学部・薬学部と筆者との最初の接点は、両学部が発足する前年度の二〇〇七年十月末であった。両学部設置委員会

の志磨慶子氏、加藤稔氏、出野倫子氏が、当時筆者が教えていた関東の大学の研究室を訪ねて来た。英語プログラムにつき意見交換をしたとのこと。当日は全学休校日で授業参観はできず、筆者の英語プログラムの説明と質疑応答をした。あれほど真剣で互いに有意義な意見交換は珍しい。

翌日、早速出野氏からメールが届いていた。筆者の拙い説明の要点をまとめ上げた感想文が添えられていた。しばらくして、谷口吉弘氏の訪問を受け、大学改革の一環としての新学部の理念を聞くことができた。手がけて来た「プロジェクト発信型英語プログラム」の集大成ができるのは、この両学部において他は無いと確信した。

生命科学部・薬学部の理念は、グローバル

社会で活躍するライフサイエンティストの育成である。グローバル社会はICT(情報通信技術)革命と、英語という汎用性と柔軟性に富むメガ言語に負うところが大きい。是非はさておき、グローバル社会のプラットフォームはICTとグローバル英語と言って過言ではない。その最前線にライフサイエンスは位置する。「プロジェクト発信型英語プログラム」は、両学部の理念と合致する。

「プロジェクト発信型英語プログラム」の詳細については、プロジェクトとTOEFLの成果とともにプログラム公式Webサイト(<http://www.pep.skritsumei.ac.jp>)とフェイスブックサイト(<http://www.facebook.com/ProjectBased English Program>)で公開されているので参照されたい。プログラムは「プロジェクト」と「スキル・ワークショップ」の二つのモジュールから成る。「プロジェクト」では、学習者が個々の関心事をテーマにプロジェクトを組み、英語で議論し成果を発信する。「スキル・ワークショップ」では、プロジェクトに要する英語スキルを磨く。二つのモジュールとも、ディスカッション、プレゼンテーション、レポート、ポスター、プレゼンテーション、リポートやリサーチ

ペーパーライティングなどのインターラクティブな活動で満ちている。学習者中心に行う授業のモチベーションは自ずと高まり、苦もなく、相当量の英語を聞いて、話して、読んで、書く。要素も濃くなり、三回生では専門的プロジェクトに移行し、学内外の専門家を招いて行うポスター・プレゼンテーションで締める。また、TOEICトレーニングを行っていないにもかかわらず、二〇〇八年六月当時の両学部一回生の平均スコアは四〇〇点そこそこであったものが、二〇一四年六月の一回生の平均スコアは約五百点に上昇した。詳細は上記Webサイトを参照されたい。

こうしたプログラムの礎を作ってくれたのは、二〇〇八年度と二〇〇九年度の両学部入学者である。最初は批判が多かったプログラムの改善にのみなみ成らぬ辛苦を共にしてくれた。二〇一〇年度からプログラムが次の段階に突入できた。それは彼らが上級生として下級生に建設的な助言を与えてくれたからである。ES(教育サポーター)として、後に、TA(ティーチングアシスタント)として一糸乱れぬサポートをしてくれた。積極的に英語で国際学会発表してこのプログラムがグローバル社会に通用することを示し、発信型英語学習の重要性を学部文化として定着させた。

二〇一一年度より始まった専門英語のJunior Project 1&2には、専門分野の教員が参加し、英語教員が英語を、専門教員がコンテンツをみるというコラボレーションが定着した。専門分野の教員のコメントは厳しくも愛情に満ち、学生の顔を生き生きさせる。世界でも専門分野の教員と英語教員

がタッグを組む英語プログラムはあまり無い。このプログラムのもう一つの特徴は、両学部執行部との密なる意見交換であろう。その下支えをしてくれているのは、両学部事務局の積極的な参加である。英語教員と事務局の連携は日常活動の一つであり、学校行政のプロの意見は何事においても貴重で、重ねた合同会議は数知れない。

このプログラムの最大の貢献者は、献身的で真摯な若手教員、特に、外国語教育センターの嘱託教員と外部教育機関の講師である。学生とのコミュニケーションを惜しまず、どの教室でも先生を囲んだ輪が出来る。教員同士の意見交換も盛んで問題に対しては全員で解決策を考える。当然のことであるが、二〇〇八年四月から二〇一四年四月三月までの筆者の在任中、遅刻・欠勤をした教員は原則無い。授業時間前に教室に来て学生達と話す若手教員の姿しか覚えていない。

「プロジェクト発信型英語プログラム」は、学生を中心に、英語教員、専門教員、事務局、そしてコミュニケーションで成り立つ。毎回、授業が始まればあっという間に時がたってしまう。学生の興味深い発信が飛び交うので止められない。毎日が時間との戦いである。学生も同じ感覚を体験しながら卒業して行く。このプログラムはオープンである。卒業生は、是非ともポスター・プレゼンテーションを見に来て頂きたい。自らも率先して企業なり研究所なりに行っている研究を発表して頂きたい。その為のサポートを生命科学部・薬学部英語共同研究室が受けるので、英語について分からないことは連絡されたい。

鈴木佑治先生のご定年退職にあたって

生命科学部 准教授 山 中 司
(平成二十三年着任)



鈴木佑治先生は、二〇一四年三月末をもって定年により、ご退職になられました。二〇一四年四月からは客員教授として、全学的な観点から英語教育のアドバイジングをされており、これからもよろしくお願ひ申し上げます。

鈴木先生は、二〇〇八年、生命科学部・薬学部開設に合わせて生命科学部生命情報学科教授として着任され、六年間お勤めになられました。前任校の慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)での発信型英語教育のご実績を踏まえ、その最新バージョンを立命館大学生命科学部・薬学部のためにゼロから立ち上げ、実践をされました。本学での英語教育を世界一にしたいと常日頃からお話しになり、そのための努力を一切惜しまれない先生でいらっしゃいました。学生にとって何が良いのか、それを常に最優先され、大きな枠組みから小さな手続き

に至るまで、そのための配慮は絶えませんでした。

今となつては、学内において生命科学部、薬学部の「プロジェクト発信型英語プログラム」は広く知られるところとなり、その成果についても高い評価をいただいています。学生の皆さんの堂々とした英語の発信能力や、TOEIC-IPTのスコア上昇等が目が行きがちですが、「プロジェクト発信型英語プログラム」の最大の成功は、鈴木先生が築いて下さったプログラムの運営手法にあると考えています。履修する全ての学生に益するように、学生、専門分野の先生方、事務局、外部コミュニケーション、英語教員が一丸となつて取り組む本プログラムのシステムは、他の追随を許すものではありません。

残された我々英語教員にとつて、鈴木先生が創られたものはこれを維持発展していくのは並大抵の努力では成し得えません。一步、地道な努力を絶やさない所存です。

松岡政夫先生との思い出

藤 岡 大 毅
(平成二十年卒)



残念なことに配属された年に、諸事情で急遽退職されることになりました。先生の下で院生になつても指導して頂けると思っていたのにと皆嘆いておりました。

松岡政夫先生が二〇一四年三月八日にご逝去されました。私が立命館に戻ってきた頃で、挨拶にでも伺おうと思つていた矢先の出来事でした。本当に残念でなりません。卒業研究にて私が配属されたのは、松岡研でした。当時の研究室は、機能めつきや太陽電池、燃料電池など、電気化学を柱とする研究をされており、社会的に大きな関心がある分野でしたので、人気が高かったように思います。先生は、「受け持った学生は責任をもつて指導する、十二分に社会で活躍できるようにする。」ということを言っておられた記憶があります。結果、大変厳しくご指導して頂き、実験した日数をカレンダーに書く(あくまで自己申告の)出勤簿?に似た物がありまして、出席が少ないとか研究をさぼっているよいうなら撤が飛んできました。今では良い思い出です。

その後、小島先生(現・無機分光化学研究室)の研究室に移籍となった私ですが、研究テーマは変更して、有機無機ハイブリッド材料の研究を進めました。退職後は、農作業をしながら、時折様子を伺いにこられ、ご指導して頂いておりました。先生がお書きになつた、「無電解めつき基礎と応用」という本があり、非常に参考にしていました。現在でも、無電解めつきについて詳細に書かれている本の一つだと思えます。その折、私が学会で講演賞を頂いた際、「この本を頂けないでしょうか?」と恐る恐る言ってみました。『確か、家に何冊か残っている、今度もつてきてやる。』と良い返事を頂きました。実際にその本以外に他二冊も頂き、「この調子で研究を進めるよう頑張れ。」と、今まで厳しく接していた先生がいつになく優しく喜んでくれたのが強く印象に残っています。あの頃に先生が理想としていたような卒業生の姿を十分教えて頂いたと感じています。ご指導に感謝するとともに、先生のご冥福をお祈りいたします。

癌と闘う

小林 義明

(昭和三十九年卒)



診したのですが、結果は同様でした。更に日赤病院では、他部位（大腸）にも初期的癌が見つかり、早々の内視鏡による手術をしたほうが良いと強く勧められました。一縷の望みを託し他病院で再び検査してもらったのですが、やはり判決は「有在」でした。結局は、日赤病院の医師の言葉「ガンは初期なので絶対に大丈夫です」を信じ手術を決断することになったのです。

けれども、これが序章で後の「癌との闘い」の物語になろうとは夢にもしておりませんでした。それは先ず、術後の切断面に未だ癌細胞が残っている事を理由にS状結腸まで切除されさらに精密検査により膵頭粘液腫の切除を促される羽目になったのです。医師の説明で膵臓癌としては初期症状なので慰められ、まともや平成十九年六月四日（最も辛かった手術日）に手術を受けました。

ロータリークラブの仲間の一人が膵臓癌の発症から半年後で亡くなっていった記憶等が頭を過り、しばらくは手術の決断が鈍りましたが、医師の意見に従うしかなかったのが事実です。

無事に手術は終わり、三ヶ月後に退院をしたのですが、大部分において膵臓が消えてしまったがために、糖尿病との付き合いを余儀なくされました。毎日のインシュリンの注射投与はいいたし方が無いと思っていた矢先、まともや一年後に肺癌が見つかり、幾度目かの要手術患者となったのです。ガンから好まれる体質だとは思ってもいかなかったです。

そしてなのですが、これ以上の罹癌の詳細は枚挙にいとまがないので、簡略します。他に咽頭癌（二回手術）、食道癌です。

誤診であることを願いつつ他の病院でも検

あったことです。早期発見と処置により全ての癌を克服できたと考えます。でも当然予防も重要なので、頑健でなおかつ病院嫌いな自分が最初の癌発見をきっかけに、見違えるように生活習慣を改善しました。別人の如く健康への配慮も著しく心がけるようになっていきます。

最近では、おかげさまで、癌との闘いも休戦状態です。

近年は、毎日の出社を日課としていますが、激務から開放される会長職として、築き上げてきた会社の発展と社員の成長を願いながら、それぞれにアドバイスを与え暖かく見守っていく仕事をしています。

最後に、心身への楽しみも大切だと考え、糖尿病調整用の小道具セットを携えながら、定期的なゴルフラウンドと年二回ほどの海外旅行がライフワークの一環となっています。これからの人生を心からエンジョイするため、気楽にのんびりと時間を過ごすことをモットーにして暮らしたいと決めている次第です。

タイムスリップ

坂口 紀元

(昭和三十九年卒)



一九六四年三月二十日六時二十六分、京都駅に両親と兄がやって来た。病弱な母は九州脱出が初めてという。小雨降る中、卒業式までの時間を御所で調整。途中数名の友と会い父母を紹介しながら式場へ。最前列に席を取った私は末川総長の力強い、感慨深い祝辞にしんみり聞き入る半面、四年間生活を切り詰め何も言わずに学資を出してくれた父母に心底感謝し、これからは自分の給料だけで生き抜かねばならないと覚悟を決めた時でもあった。

分析化学の祝賀会は宇治の山本宣治の家『花屋敷』で挙行。皆の顔は夫々が決めた道に何の不安もない笑顔で溢れていた。俺はこれからが大変と陰の顔を隠し大いに騒ぎ、いつの日かまた逢う日まで皆さん達者でなと心の中で叫んでいた。永井先生から「君達給料分は働けよな」と当時の流行語三ズ主義「遅れず、休まず、仕事せず」に気軽に乗るな、一生懸命努力してより多い給料をもらいなさいと解釈。

翌日は日本晴れ、銀閣寺を一巡バスで比叡山へ。山頂からの琵琶湖の眺めは両親に歓声を挙げさせる程最高の景色が眼下に広がっていた。八瀬の窯風呂はロープウェイ、ケーブルカーを乗り継ぎ、母を京の湯治場気分させられればと計画し、入浴料は高かったが思いは通じた。―以上日記帳より抜粋―

卒業五十周年記念祝賀会は思った以上に盛大で発展を続ける立命の姿に拍手喝采。肉食応援団の出現はその声と動き、校歌と応援歌そしてアルコールで否応なく学生時代に引き戻された。参加して本当に良かったと大満足。次に大野さん宅で時の経つのも忘れておもてなしに酔い、浅草で会う約束でしめる。

中村さんは今も現役バリバリだ。忙中に衣笠校舎を案内してもらおうが昔の面影を求め散策すれど玉手箱の世界だ。彼は尾瀬に行きたいという。初秋に……。人生八十年足腰がしつかりしているうちに、小、中、大の同期会、OB会等にできる限り参加したい。

会員だより

トルコイスタンブールの魅力に魅せられて

松尾 安藏
(昭和五十五年卒)

卒業後、ご縁があって就職した会社を十五年前に退職し、現在経営労務コンサルタント事務所をやっています。一昨年、不思議なご縁で京都にてトルコ絨毯を販売されているお店にたまたま立ち寄ったことから、トルコ共和国とのご縁ができました。そこで、昨年冬の寒い時期でしたが、一人イスタンブールへ旅立ちました。入国した日は折しもたいへんな大雪で、空港も市内も一面雪化粧でしたが、とてもエキゾチックな風景でした。

イスタンブールは、昔東ローマ帝国時代には、コンスタンティノープルと呼ばれていましたが、その後オスマン帝国によって支配され、現在のトルコ共和国の第一の都市となっています。人口は、約千四百万人で、トルコ全人口(約七千六百万人)の約十九%を占めています。宗教は、国民の九十九%がイスラム教徒です。イスタンブールは、西洋と東洋を結んだシルクロードの要所として栄え、東

西の文化が融合した独特の文化を形成しています。現在もモスク(イスラム寺院)をはじめ多くの世界遺産が登録されています。そして、市内には多くの市場があり、特にグランドバザールは、場内には約二千軒もの店があり、イスタンブール市民だけでなく、多くの観光客で賑わっています。また、昨今、多くのショッピングモールが建設されて来て、日本にある大型商業施設と変わらない品揃えです。それからもう一つトルコには有名なダンスがあります。最近日本でも習っている人が増えているようですが、それがベリーダンスです。ダイエット効果があり、女性には人気のダンスです。まだまだ、紹介したいことがたくさんありますが、紙面の関係もありますので残念です。日本ととも友好的なトルコ共和国へ皆さまもぜひ一度訪れてみてはいかがでしょうか。きっと、トルコの魅力に取りつかれてしまうことでしょう。



イスラム教寺院の世界遺産スルタンアフメットジャミ(通称ブルーモスク)

会員だより

立木研究室同窓会

矢野 成和
(平成十二年卒)

私と立木 隆先生のこれまでの関わりについてご紹介させていただきます。立木先生の研究室で博士課程まで過ごし、その後、二〇一二年の三月末まで立命館の助手・助教として7年間勤めました。結局、研究室に所属してから十三年間も先生のお世話になりました。今も二ヶ月に一度は先生と酒を飲みつつ、現職の山形大学助教としての悩みを聞いてもらい、そして研究の相談をしています。私のように立木先生を慕う卒業生は多く、事あるごとに研究室の同窓会を開いております。

今年の二月二十二日も特任教授の退職を記念するという名目で、総勢四十名を集めた同窓会を開催しました。幹事の先輩方の尽力によって、立木研究室の一期生から最終の二十一期生までが集うという非常に幅広い年齢層の会になりました。

同窓会では、食事や会話を楽しむだけでなくイベントも企画しておりました。古典的な手法ですが、微生物を培養する際に試験管に綿栓をつめて通気できるようにします(写真中央)。イベントとして綿栓早詰め大会を行いました。その早さだけでなく綿栓の硬さや美しさを競いました。全員が「立木先生を超える」と言っていたのは嬉しかったです。学生時代は面倒くさいだけの綿栓でしたが、今から思えば古典的な技術を学べたこと、そして、いつまでも卒業

生共通の話題であることに感謝しております。同窓会を行うたびに、「参加者のほとんどが研究室に在籍した当時に立木先生の厳しい指導を受けたはずなのに、どうしてこんなに人も人が集まるのか？」という疑問が生じます。各年度代表者が自己紹介と思いつく簡単にスピーチしたのですが、やはり怒られた話題で大盛り上がりになりました。立木研究室はただ厳しいだけではなく、そこにはそれぞれが思う大事なものがあつたのだと、私は考えています。もしそれ以外の要素があるとするならば、吞兵衛が多かつたということなのでしょう。

私は、他大学で教員を続けております。そこで、立木研のような研究室を作ります。



企画運営委員会報告

委員長 伴野 清
(昭和四十二年卒)

皆様方の交流と親睦を図るための各種企画のご案内並びに運営状況について、ご報告させていただきます。日頃は、何かとご協力をいただき有難うございます。

さて、今年度も幹事の方々にお世話いただき「ゴルフ・懇親会」、「ハイキング」、「釣り天狗クラブ」および「温泉研究会」の各活動が繰り広げられました。

また、本年度は「特別企画セミナー」と題して、本学アメリカンフットボール部パンサーズのヘッドコーチ（監督）、米倉輝氏を講師にお招きして、ご講演をいただきました。今後、会員の皆様も益々増えていくと思っておりますので、皆様方のご協力をいただきながら、より一層充実した企画運営を続けてまいります。

それぞれの開催案内は、引き続き、事務局からお送りしておりますので、参加ご希望の方は、事務局までご一報下さいますようお願いいたします。

「企画運営委員会の開催」

平成二十六年二月二十三日（日）

京都タワーホテルにおいて、これまでの総括と今後の活動について打ち合わせを行い、当面、現行の企画運営テーマを柔軟的に運営していくことを確認しました。

第二回 特別企画セミナーの開催

平成二十六年二月二十三日（日）

本年度は「常務を義務付けられた組織の取り組み・マネジメント」と題して、本学アメリカンフットボール部パンサーズのヘッドコーチ（監督）、米倉輝氏から熱く語っていただきました。

学生全国制覇の偉業・甲子園ボールから、日本一を争うライスボールでの優勝を経験された、米倉輝氏ならではの、組織作りと戦略を、大変興味深くお話しいただきました。（詳細は本号九ページ）

第四回 釣り天狗クラブ

平成二十五年九月二十二日（日）

目片秀明様のお世話により、「いわなの里 永源寺グリーンランド」にて、魚釣りとバーベキューの楽しいひと時を過ごしました。釣りのご経験なくても、準備はまったく不要です。皆様お気軽にご参加ください。

第三十一回 ゴルフ・懇親会

平成二十五年十月二十四日（月）

幹事の三上正勝様・西村定様にお世話いただき、京都「東城陽ゴルフ倶楽部」において開催されました。当日は九名の方にご参加いただき、和気あいあい親交を暖めることができました。競技方法は新ペリア方式で行い、永井博様が優勝されました。おめでとうございます。



第二十七回 ハイキング

平成二十五年十一月二十四日（日）

西村博様と木全豊和様に幹事をお願いし、「伏見稲荷大社から四条木屋町まで」の名所のハイキングを楽しみました。

参加者十三名、伏見稲荷大社、泉湧寺、今熊野観音寺、清水山、清水寺、八坂神社、四条木屋町までの十二kmのコースを楽しみ、打ち上げ懇親会を行い大いに盛り上がりました。



第三十二回 ゴルフ・懇親会

平成二十六年五月七日（金）

三上正勝様・西村定様にお世話いただき、五月晴れの宇治カントリークラブで開催され、十三名と多くの方にご参加いただきました。

日頃の運動不足が解消され、皆様楽しくプレーできました。松村済太郎様が優勝されました。おめでとうございます。



第二十八回 ハイキング

平成二十六年五月二十五日（日）

高岡滋雄様と木全豊和様に幹事をお願いし、絶好のハイキング日和の中、参加者十二名が、阪急夙川駅、北山緑化植物園、甲山森林公園、関西学院大学、阪急西宮北口のコースに挑戦しました。

結構きつい箇所もありましたが、森林が多く、心地よい風が吹きましたので、全員無事に完歩することができました。疲れは懇親会で吹き飛んだようです。



第六回 温泉研究会 幹事会

平成二十六年六月二十八日（土）

京都市北区の宇多野ユースホテルで本年度の幹事会が奥野年秀様のお世話により開催されました。

本会では、十一月二十九日に和歌山県・竜神温泉で開催予定の第四回総会に関する計画について、協議されました。温泉を愛する皆様方のご参加をお待ちしています。



「常勝を義務付けられた組織の 取り組み・マネジメント」



立命館大学体育会
アメリカンフットボール部

監督 米倉 輝

●はじめに

一九五三年に創部されたアメリカンフットボール部は昨年創部六十周年を迎えました。長く続いた低迷時代から一九九四年に悲願の初優勝を成し遂げ、現在では日本選手権優勝三回、全日本大学選手権優勝七回、関西学生リーグ優勝九回の、押しも押されぬ強豪チームとなつて現在に至っています。二〇一〇年の全日本大学選手権優勝以降、二〇一一年〜一三年は宿敵関西学院大学の後塵を拝し、三年連続関西学生リーグ二位に甘んじている我々が、今年度捲土重来を期し日々取り組んでいる活動の一端をご紹介できればと思います。

●アメリカンフットボール部におけるチームづくり

アメリカンフットボールには現在一八三名の学生が所属しています。このうち「選手」は一三四名、あとの約五〇名はマネージャー（総務）

、トレーナー（トレーニング・栄養サポート、障害予防・リハビリなどを担当）、アナライジングスタッフ（ビデオ撮影、戦術分析）などの裏方です。ひとつのチームの中に、まったく違う活動内容の学生達が混在しており、ともすればチームとして共通の目標、価値観が薄れがちになります。われわれ指導陣はこれを防ぐため、まずアメリカンフットボール部および部員としての共通の目標を全員に理解させることから部の活動をはじめています。

●チームゴール

アメリカンフットボール部員共通の目標は単なる日本一では有りません。まず一立命館学生として文武両道を実践し、社会的存在であることを認識し、そして社会に有為な人材となる、これをチーム全員に「チームゴール」という形で理解・浸透させています。

「チームゴール」

《日本一になること》

《尊敬され支援されるチームになること》

《立命館大学生として成長すること》

このチームゴールは、戦績が上昇曲線を描き続けた時代、ともすれば勝利至上主義に陥

りがちだった状況を猛省し定められたもので、現在では春の新チームスタート時に、チーム全員で徹底的に議論を行っています。

●チームゴール達成への取り組み

チームゴール達成のために、我々は通常の強化練習の他にグラウンド外で様々な取り組みを実施しています。その一端をご紹介します。

① 各種講演会の実施

大学で学ぶとは・・・立命館大学学長
アマチュアスポーツを通じた人格形成・・・
日本高野連顧問

現代社会に潜む危機・・・京都府警担当者
など、競技力強化に直接関係の無い事柄についての講演会を年間数回実施しています。

② 学業とスポーツの両立を目指して

アメリカンフットボール部の活動はすべて授業最優先で行っており、練習開始は毎日夕方六時以降とし、授業への出席機会を保障しています。理工学部・生命科学部、情報理工学部の理系三学部に在籍する選手も多く、毎年数人は大学院へと進学しています。

●王座奪還へのとりくみ

前述のように、「チームゴール」達成に向け日々の活動に取り組んでいます。なかでも《日本一になること》については、校友の皆様からのご期待も高く、われわれも最も力を割いております。三年間連続で関西学院大学の後塵を拝したことで、ゼロからの再出発を掲げ今年度の活動をスタートしています。最後に、私と学生幹部が今年度最初に誓ったチーム運営の指針を記したいと思います。必ずや関西学院大学に勝利し、一月三日校友の皆さんで満員となった東京ドームで躍動したいと思えます。

「虚心坦懐」

積み重ねてきた経験は、ともすれば物事を穿った目で見る先入観のメガネとなる。心に先入観・わだかまりなく物事を捉える姿勢が我々には必要である

「誰よりも熱い情熱」

組織は人で成り立つ。人が燃えなければ組織も燃えない。我々が燃えるような熱い情熱をもち、その熱意を組織に熱伝導させることで初めて目標に立ち向かう組織が生まれる

「近道なし」

正直、愚直、真つ向勝負、泥臭く、地道、確実・・・目の前の課題・困難に一つづつ謙虚に取り組み解決してゆこう。そうして乗り越えた課題・困難が真の力に転化する。



新任の先生から一言

田中 謙先生



本年四月より薬学部教授として着任いたしました。専門分野は、生薬学、天然物化学で、薬用植物中の活性成分の単離・構造解析や環境変化に対する生合成変動について研究しております。薬学部の発展に貢献できますよう教育・研究に精進致す所存です。皆様のご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

略歴
一九八三年 富山医科薬科大学薬学部卒業。
一九八五年 富山医科薬科大学大学院薬学研究科修了、同年 警察庁・科学警察研究所。
二〇〇五年 富山大学和漢医薬学総合研究所助教（准教授）。
二〇一四年 本学着任。

荒木 希和子先生



本年四月より生命科学部助教として着任しました。専門分野は環境科学・生態学です。植物を中心とした生命と地球環境の統合的理解を深めていきたいと考えています。多くの人との出会いを大切に、本学の研究活動や教育に貢献できるよう精一杯努めてまいりたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

略歴
二〇〇三年 滋賀県立大学環境科学部卒業。
二〇〇八年 北海道大学大学院環境科学院生物圏科学専攻修了、博士（環境科学）。
二〇〇八年 京都大学生態学研究センター日本学術振興会特別研究員・機関研究員。
二〇一四年 立命館大学生命科学部助教。

上島 智先生



本年四月より薬学部助教として着任いたしました。専門は薬物動態学で、薬物の体内動態と薬効・副作用の関係について数理モデルを用いて解析し、この結果に基づいた個別化薬物療法へ応用するための研究を行っています。前任地で培った知識や経験を活かして本学での教育や研究に貢献する所存です。皆様のご指導・ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

略歴
二〇〇四年 京都薬科大学薬学研究科博士前期課程修了、同年岡山大学病院薬剤部 薬剤師。
二〇〇九年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科博士後期課程修了、博士（薬学）。
二〇一一年 京都大学医学部附属病院薬剤部 薬剤師。
二〇一四年 現職。

河野 裕允先生



本年四月より薬学部助教として着任いたしました。専門分野は、ドラッグデリバリーシステム、薬物動態学で、外部刺激を利用した薬物送達システムについて研究を行っております。本学におきまして研究はもろんのこと、研究者、薬剤師を目指す学生の教育にも精励する所存ですので、皆様のご指導、ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

略歴
二〇一四年三月 京都大学大学院薬学研究科博士後期課程修了。
二〇一四年四月 本学着任。

こじま
あや
小嶋 絢先生



本年四月より薬学部助教として着任致しました。専門分野は分析化学です。

これまで学んできたペプチド化学や分子生物学などの実験手法や知識を活かして、新たに糖鎖修飾の分析法を学び、より視野を広げていきたいと考えております。教育も初めてのことばかりですが、精一杯取り組んで参りますので、皆様のご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。

略歴

二〇一二年三月 摂南大学薬学部博士後期課程修了博士(薬学)。
二〇一一年四月 東京大学医科学研究所特任研究員。
二〇一四年四月 本学薬学部に着任。

さいとう
りょう
齋藤 僚先生



本年四月より薬学部助教として着任いたしました。専門分野は神経薬理学および薬理系薬学です。小胞体ストレス応答の生理学的意義と、各種疾患発症との関連に興味を持ち研究を行っています。教育・研究に力を注ぐ所存ですので、皆様のご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

略歴

二〇一三年四月 日本学術振興会特別研究員(千葉科学大学)。
二〇一四年三月 千葉科学大学大学院薬学研究科博士課程後期課程修了、博士(薬科学)。
二〇一四年四月より立命館大学薬学部助教に着任。

やまだ
しげゆき
山田 重之先生



本年四月より生命科学部応用化学科の特任助教として着任致しました。これまでに培った研究経験を活用し、本学では、機能材料の創製に向けた研究を展開したいと考えております。

教育者・研究者として、未熟ではありますが、皆様のご指導・ご鞭撻を頂戴しながら、本学の教育・研究の発展に貢献できるよう努力して参りたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

略歴

二〇〇八年三月 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科博士後期課程終了、博士(工学)。
二〇〇八年九月 アレキサンダー・フォン・フンボルト財団奨学研究員(ミュンヘン大学)。
二〇一〇年九月 博士研究員(京都大学)。
二〇一一年四月 産学官連携研究員(東京農工大学)。
二〇一四年四月 立命館大学生命科学部応用化学科特任助教。



立命化友会名誉会員

(敬称略)

石井 勇 三
岡本 文 一郎
小野 昭 義
河口 昭 義
近藤 紘 一
鈴木 啓 三
高橋 玲 爾
竹内 良 夫
立木 隆
谷利 陸 平
谷口 吉 弘
土屋 正 夫
中村 尚 武
橋谷 博
林 隆 俊
林 隆 俊
深 海 浩
松田 十 四 夫
三代澤 良 明
山本 善 史
吉田 真

立命化友会役員名簿

(敬称略)

顧問 大原八十八(30年)
田村弘三郎(31年)
北尾 舒彦(39年)
白井 総(56年)
金川 義孝(39年)
谷口 吉弘(40年)
伴野 清(42年)
北 泰行(平20年着任)

常任幹事

岸 要(25年)
香山 彰朗(31年)
松田十四夫(38年)
木全 豊和(40年)
中村 尚武(41年)
池田 昌彦(42年)
荒木 武彦(43年)
篠原 長政(43年)
酒井 芳夫(44年)
木越 俊雄(46年)
城戸 正憲(46年)
松本 浩一(51年)
前辻 啓志(59年)
目片 康人(61年)
田口 肇(62年)
小林 久人(平2年)
目片 秀明(平4年)
森崎 久雄(平5年着任)
山田 佳博(平9年)
矢野 成和(平12年)
谷口 直哉(平15年)
長野 正道(平15年着任)
前川 昭(52年)
松尾 安蔵(55年)
庶務幹事代表 澤村 精治(49年)
会計幹事代表 白石 晴樹(47年)
学内幹事 藤田 典久(51年)
小島 一男(52年)
岡田 豊(54年)
加藤 稔(院62年)
花崎 知則(平1年)
北原 亮(平9年)
里見 潤(昭63年着任)
民秋 均(平5年着任)
今村 信孝(平7年着任)

小堤 和彦(平7年着任)
久保 幹(平8年着任)
玉置 純(平8年着任)
若山 守(平11年着任)
高木 一好(平12年着任)
高橋 卓也(平15年着任)
鈴木 健二(平15年着任)
伊藤 将弘(平16年着任)
菊地 武司(平16年着任)
浅野 真司(平16年着任)
前田 大光(平16年着任)
笠原 賢洋(平17年着任)
早野 俊哉(平17年着任)
堤 治(平19年着任)
下妻晃二郎(平19年着任)
一川 暢宏(平19年着任)
木村 富紀(平19年着任)
藤田 卓也(平19年着任)
高田 達之(平20年着任)
豊田 英尚(平20年着任)
土肥 寿文(平20年着任)
今中 忠行(平20年着任)
野間 昭典(平20年着任)
堀 利行(平20年着任)
池谷 幸信(平20年着任)
稻田 康宏(平21年着任)
三原 久明(平21年着任)
天野 晃(平21年着任)
寺内 一姫(平21年着任)
稲津 哲也(平21年着任)
谷浦 秀夫(平21年着任)
服部 尚樹(平21年着任)
小池千恵子(平21年着任)
岡野 友信(平22年着任)
角本 幹夫(平22年着任)

藤田 隆司(平22年着任)
土屋 友房(平23年着任)
石水 毅(平24年着任)
田中 秀和(平25年着任)
桂 敏也(平25年着任)
竹田 篤史(平25年着任)
川村 晃久(平25年着任)
田中 謙(平26年着任)
年度幹事 田中 謙(平26年着任)
専門学校(二部工科) 昭23年 桂 茂生
(二部理科) 昭23年 桂 茂生
(二部理科) 20年 馬野 正敏
24年 今達 緯治
25年 竹内 良夫
26年 八木 永治
(二部理科) 20年 西村 新一
25年 岸 要
26年 九鬼 敏隆
新制大学
(二部化学科) 28年 九鬼 敏隆※
八木 永治※
29年 東 龍夫
30年 片山治市郎
33年 池田 茂
36年 山本 好春
37年 寺田 卓二
41年 天田 健治
42年 加納 修
(二部化学科) 27年 松岡 彦次
31年 香山 彰朗
32年 岡本 朗

33年 磯野(田村)喜美子
34年 花澤 明
36年 近藤 照雄
37年 大谷 芳亨
38年 奥野 年秀
松尾 篤治
松本 幹生
39年 金川 義孝
40年 木全 豊和
41年 東 正弘
42年 野田 博之
43年 伴野 清
篠原 長政
伊藤 省二
木村 嘉勝
44年 長井 広次
45年 村上 俊男
46年 木越 俊雄
47年 城戸 正憲
宮地 淳
白石 晴樹
48年 寺石 雅和
49年 澤村 精治
51年 松本 浩一
53年 久保田和孝
54年 河村 眞也
川澤 吉雄
岡田 豊
坂本 隆
55年 岡田 豊
56年 松尾 安蔵
安田 哲
57年 白井 信之
片山 勝隆
58年 北河 英次

14年 網本恵美子
 13年 廣瀬 琢磨
 13年 五十嵐亮介
 13年 笹橋福太郎
 12年 松宮 芳樹
 12年 宇野健二朗
 12年 山本 幸子
 11年 山田 修司
 11年 平本 豪志
 11年 小池 竜一
 10年 川中さやか
 10年 岩井 啓能
 9年 山田 佳博
 9年 武田 周子
 8年 岡部 直樹
 8年 磯貝 秀人
 7年 村山 公一
 7年 宮武 智弘
 6年 草野 富雄
 6年 尼川 雅章
 5年 北口 均
 4年 目片 秀明
 4年 中井 武裕
 3年 中村 俊博
 3年 桐村 寛
 2年 小林 久人
 2年 大山 良隆
 平1年 粟津 尚之
 63年 坂根 正恭
 62年 田口 肇
 61年 目片 康人
 60年 菊池 英知
 59年 長谷川圭一
 59年 野口 剛

15年 西田 悠里
 15年 谷口 直哉
 15年 原田 雅央
 16年 塩川 敬子
 16年 加瀬澤邦浩
 16年 加藤 豊
 16年 野田 悠太
 19年 濱口 直之
 19年 山本 貴代
 21年 空閑 健透
 24年 小林 亮太
 24年 平田 俊輔
 24年 志茂 欣子
 企画運営委員会
 委員長 伴野 清(42年)
 委員 木全 豊和(40年)
 委員 木越 俊雄(46年)
 松本 浩一(51年)
 小林 久人(平2年)
 目片 秀明(平4年)
 前田 大光(平16年着任)
 ニュース編集委員会
 委員長 金川 義孝(39年)
 副委員長 加藤 稔(院62年)
 委員 岸 要(25年)
 奥野 年秀(37年)
 城戸 正憲(46年)
 藤田 典久(51年)
 小島 一男(52年)
 目片 康人(61年)
 田口 肇(62年)
 高木 一好(平12年着任)
 笠原 賢洋(平17年着任)

平成25年9月1日から平成26年9月30日の間に、ご逝去の連絡を頂いた方々です。
 心よりご冥福をお祈り申し上げます。

物故者

松岡 政夫 (旧教員) (昭18年卒)
 竹本 善雄 (昭18年卒)
 宇野 繁市 (昭19年卒)
 岡村 良生 (昭20年卒)
 大原 三郎 (昭20年卒)
 高橋 邦夫 (昭20年卒)
 吉川 由明 (昭22年卒)
 文田 善三 (昭22年卒)
 神門 欣二 (昭22年卒)
 井上 秀雄 (昭22年卒)
 新美 純一 (昭22年卒)
 矢持 勇 (昭23年卒)
 尾藤 博巳 (昭23年卒)
 原田 洋 (昭23年卒)
 樺本 崇 (昭23年卒)
 坪田 昭 (昭23年卒)
 中田 元一 (昭23年卒)
 林 元一 (昭24年卒)
 細見 健 (昭24年卒)
 北尾繁太郎 (昭25年卒)
 森 浄郎 (昭25年卒)
 疊谷 宣夫 (昭25年卒)
 有麻 登 (昭25年卒)
 日夏 和夫 (昭26年卒)
 中谷 信夫 (昭26年卒)
 人見 寅三 (昭27年卒)
 北村 晴吉 (昭27年卒)
 石橋 義弘 (昭27年卒)
 西村 敬一 (昭27年卒)
 神田 幸雄 (昭27年卒)
 大島 敏男 (昭28年卒)
 中澤 松男 (昭28年卒)
 吉見 常雄 (昭31年卒)
 市橋 秀巳 (昭31年卒)
 豊田 一夫 (昭31年卒)
 平野 典子 (昭32年卒)
 初岡 憲城 (昭32年卒)
 北村 博彦 (昭32年卒)
 藤原九十郎 (昭34年卒)
 大藏壮一郎 (昭35年卒)
 安藤 政義 (昭36年卒)
 谷口 修身 (昭37年卒)
 金山 弘幸 (昭38年卒)
 伊藤 徹 (昭39年卒)
 河内 聰 (昭40年卒)
 野村 祥紀 (昭42年卒)
 保野 尚男 (昭42年卒)
 西村 浩 (昭42年卒)
 南出 和夫 (昭43年卒)
 松井 正徳 (昭44年卒)
 田中 治夫 (昭44年卒)
 渡辺 尚俊 (昭45年卒)
 山本 和長 (昭45年卒)
 下川 清和 (昭47年卒)
 堀 誠克 (昭50年卒)
 飯田 倫 (平6年卒)
 飯田 倫 (平6年卒)

お詫び

立命化友会ニュース第二号の「第二十九回 ゴルフ懇親会」および「第三十回 ゴルフ懇親会」の欄にて、お名前前の表記間違えがありましたのでお詫びして訂正させていただきます。

誤 「河村善雄様」
 正 「河村喜雄様」

編集後記

本年七月、立命化友会第二回総会および同窓会創立(前身・化学科同窓会)三十周年記念祝賀会を京都タワーホテルで開催し、会員二百名以上の方に参加頂き、六代目の新会長を選出、記念講演では谷口吉弘先生より思い出深い衣笠キャンパスからBKCへ移転する経緯を聴き、大変有意義でした。

本年六月富岡製糸場が国内初の近代産業遺産として世界遺産へ登録されました。一方、気候変動による災害が多発しました。二月、関東甲信、東北地方で記録的な大雪に見舞われ、八月、広島安佐南地区に局地的豪雨が降り土砂災害が発生しました。

立命化友会は今会長を中心に生命科学部、薬学部会員の方々と積極的に活動し同窓会のさらなる発展を目指しましょう。
 (金川)

立命化友会 2013年度事業報告

I. 諸事業

1) 2013年3月卒業生名簿作成	2013年	6月
2) 在校生ソフトボール大会	2013年	12月
3) 立命化友会ニュース(第2号)発行	2013年	11月 1日
4) 全会員への通信	2013年	11月
5) ゴルフ懇親会の開催		
・第31回	2013年	10月24日
・第32回	2014年	3月28日 (雨の為順延)
6) 卒業・修了パーティー	2014年	3月22日
7) 立命化友会ハイキングの開催		
・第26回	2013年	4月21日
・第27回	2013年	11月24日
8) 釣り天狗クラブ		
・第4回	2013年	9月22日
9) 温泉研究会		
・第5回幹事会	2013年	7月 8日
・第3回総会	2013年	11月11日
10) 特別企画セミナー		
・第2回	2014年	2月23日

II. 諸会議

1) 幹事会		
・第1回	2013年	6月30日
・第2回	2014年	2月23日
2) 企画運営委員会	2014年	2月23日
3) 立命化友会ニュース編集委員会		
・第1回	2013年	6月15日
・第2回	2013年	9月15日
4) 同窓会設立30周年事業準備委員会		
・第1回	2013年	6月30日
・第2回	2013年	9月28日
・第3回	2013年	12月 8日

III. 支部活動

(関東支部、東海支部、中国・四国支部) なし

立命化友会 2014年度事業計画

I. 諸事業

1) 2014年3月卒業生名簿作成	2014年	6月
2) 第2回総会	2014年	7月20日
3) 同窓会設立30周年記念式典	2014年	7月20日
4) 立命化友会ニュース(第3号)発行	2014年	11月 1日
5) 全会員への通信	2014年	11月
6) 在校生ソフトボール大会	2014年	11月29日
7) 卒業・修了パーティー	2015年	3月21日
8) ゴルフ懇親会の開催		
・第32回(順延分)	2014年	5月 7日
・第33回	2014年	10月15日
9) 立命化友会ハイキングの開催		
・第28回	2014年	5月25日
・第29回	2014年	11月21日
10) 釣り天狗クラブ		
・第5回	2014年	11月 9日
11) 温泉研究会		
・第6回幹事会	2014年	6月28日
・第4回総会	2014年	11月29日
12) 特別企画セミナー		
・第3回		未定

II. 諸会議

1) 幹事会		
・第1回	2014年	5月11日
・第2回	2015年	2月(予定)
2) 企画運営委員会		未定
3) 立命化友会ニュース編集委員会		
・第1回	2014年	6月29日
・第2回	2014年	9月21日
4) 同窓会設立30周年事業準備委員会		
・第4回	2014年	4月27日

III. 支部活動

(関東支部、東海支部、中国・四国支部) 未定

立命化友会 2013年度決算

(単位:円)

一般会計

〈収入の部〉	予算額	執行額
前年度繰越金	920,678	920,678
前年度繰越金	2,704,428	2,704,428
会費(学生)	3,690,000	3,690,000
寄付金	10,000	251,230
雑収入	1,000	389
合計	7,326,106	7,566,725 ①

〈支出の部〉

	予算額	執行額
同窓会30周年事業準備費	50,000	17,550
事業等補助金	300,000	134,594
地域別活動推進費	250,000	0
会議費	150,000	58,469
印刷費	800,000	794,257
郵送費	1,000,000	618,714
人件費	1,000,000	940,506
事務局費	250,000	48,057
雑費	50,000	0
拠出金(連絡協議会へ)	180,000	180,000
在学生活動援助費	360,000	360,000
振込み手数料	10,000	4,095
予備費	2,926,106	0
合計	7,326,106	3,156,242 ②
収入支出差引残額 (①-②)		4,410,483

応化会基金(仮称)

〈収入の部〉	予算額	執行額
繰越金	4,294,169	4,294,169
合計	4,294,169	4,294,169 ③
〈支出の部〉	予算額	執行額
30周年記念事業用記念品	0	463,050
合計	0	463,050 ④
収入支出差引残額 (③-④)		3,831,119

立命化友会 2014年度予算

(単位:円)

一般会計

〈収入の部〉	予算額
前年度繰越金	4,410,483
会費(学生)	3,690,000
寄付金	10,000
雑収入	1,000
合計	8,111,483

〈支出の部〉

	予算額
総会開催費	2,500,000
同窓会30周年事業準備費	50,000
事業等補助金	300,000
地域別活動推進費	250,000
会議費	150,000
印刷費	800,000
郵送費	1,000,000
人件費	1,000,000
事務局費	250,000
雑費	50,000
拠出金(連絡協議会へ)	180,000
在学生活動援助費	360,000
振込み手数料	10,000
予備費	1,212,008
合計	8,112,008

応化会基金

繰越金	3,831,119
合計	3,831,119